

問題行動をもった児童の指導はいかにあるべきか

足利市立北郷小学校 清水 登

1. まえがき

近頃の新聞紙上をにぎわすことの1つに、小学生の自殺、窃盗、暴力などがある。なぜこのような問題行動をする子供が、小学生という低年令に見られるようになってきたのだろうか。教育に携わる者にとっては、この現代社会の病理現象を単なる社会事象として見過ごすことはできない。

まず、その要因として考えられることは、親の生活態度である。終戦直後の社会不安と貧困の中に生まれた人々が、父となり母となって、その子がすでに中学生になっている人もいる。更に、昭和25年6月の道徳の退廃が極に達した時に生まれた人の子でも、小学校に入学しあげられている。当時は、生きることが先決で、忍び難きを忍び、耐え難きを耐えて育ってきたことは確かである。この現実の厳しい生活条件に打ち勝ってきたということが、あるいは、しつけらしいしつけがなされなくとも、さしたる社会問題も起こさずに過ごすことができたのかも知れない。ところが、それらの人々が親となった時、生活条件は豊かになってきたけれども、親として子供に何をしつけるべきか、途方に暮れたり、生きた手本となるような生活態度も身につけていない人もかなりいるということである。

次に、昭和35年頃より日本経済のめざましい発展期にさしかかり、これらの人々が親となったころには、神武景気とか岩戸景気といわれ、猫の手も借りたいほど労働力を必要としていた。この時にあたりこれらの人々は、子供の教育を放り出して働きに出てしまった。その時の「付け」が今になって回されてきているのである。

そのうえ、情報化社会となり、テレビ、広告、雑誌など、教育上子供にとって思わしくない情報がはんらんしていることも、その要因として数えあげられるであろう。特にテレビの宣伝による限りのない欲望の増大は、抑制する力のない子供たちに慢性的欲求不満をつのらせることになる。この欲求不満が非社会的問題行動や反社会的問題行動を起こさせる原動力になるのである。

要するに、問題行動児の指導にあたっては、まず親の教育から取りかからなければならないことが多く、時には親子を切り離さなければ、子供を立ち直らせることができないこともある。インスタント食品を与えられ、テレビに子守りをさせられ、親のふしだらな生活を見習って育ってきた子供たちが、問題行動児として社会の表面に現われ出してきたところである。この傾向は今後もしばらく続くものと見なければならないであろう。

次にあげる指導事例は、好きな物を与え、テレビに子守りさせた結果、社会性や耐性がなく、登園拒否を起こし、学校に入学してから乱暴な行動をしていた児童の指導である。

2 事例

- (1) 問題行動児の氏名 K児（現在小学校3年）
- (2) 問題行動（反社会的問題行動・乱暴）

2年生になった始業式の日から、転入生などに乱暴狼藉をはたらき、級友にも傷を負わせる等

目に余る行動をするので、ときどき母親を学校に呼んだり、家庭に出向いたりして、父親とも相談しながら、家庭の協力を得て指導した結果、年度の後半には暴力は振るわなくなった。今年度若い女の先生が担任となり、1学期の間は小康状態を保っていたが、2学期の後半から、わがままが出てきて、それを先生がきいてくれないといって、先生に対して反抗的態度に出るような場面も見られたので、教育相談を強化し指導中である。

(3) 背景及び形成要因

K児が満1才になるまでは東京に住んでいた。父は会社に勤め母は育児に専念していた。K児が1才のとき、父の会社が倒産して東京での生活のめどが立たなくなってしまったので、しんせきを頼って現在の土地を購入し家を建てた。場所は赤松団地の近くで、当時は人里離れた田んぼの中の1軒屋であった。父は縫製業を始め、母もその仕事を手伝って生計を立てることになった。多額の出費があったので、2人は夜更まで一生懸命に働いた。父は仕事のことで外出することもあったが、母はK児を見守りながら、仕事に精を出さなければならなかった。K児には手がかかるないように欲しがる物は何でも与えて、隣の部屋の中で1人遊びをさせ、テレビを見せておいた。近所の家も遠かったし、母親はこの土地を全然知らなかったので、忙しさに紛れて、K児を外へ連れ出して同じ位の子供と遊ばせることは全然なかった。時々両親が言葉をかける位の生活が、幼稚園に行くまで続いた。そのころは両親のいうことをよく聞いて、物わかりもよかったです、どんな良い子に育ってくれるかと、期待で胸をふくらませて、毎日を過ごしていたと述懐していた。

(4) 症状の出現

(ア) 幼稚園のころ

ところが、幼稚園に行くようになってから、この希望もむなしく夢と破れ、苦しみと悲しみの続く毎日を過ごさなければならなくなってしまった。幼稚園へ行き始めは友だちに会える喜びと、バスに乗れる楽しさで、元気に行ってくれたが、間もなく登園拒否を始めた。幼稚園へ行くのをいやがり、とうとう幼稚園バスに乗らなくなってしまい、母親が送つて行って帰りまで付き合わせられることがしばらく続いた。この頃は暴力を振るうどころか、泣き虫で幼稚園の先生を大変困らせたとのことだった。また、自分のものと他人のものとの区別ができず、友だちが使っているものは、何でも欲しくなると取って使ってしまうので、友だちとの争いが絶えず、意地悪といわれのけ者にされることが多かった。

小学校の1日入学が始まつてからは昼過ぎになると、家から300m位離れた小学校へ遊びにきて校庭で大声を張り上げ棒振り回して遊び、遊ぶときは、1・2年生を部下にして、いつも年上の子としか遊ばなかった。

(イ) 1年生のとき

家も近く入学以前によく学校へ遊びにきていたので、自分の繩張りのような気持ちで威張り散らし1年生のけんかのチャンピオンとして自他共に認めていた。授業中にも本を出さず出歩いたり、騒いだりして先生を困らせていました。時々親を呼んで注意したり、協力を求めたりしていた。担任は女の先生だったが厳しかったのでよく注意され前の座席へ出されて勉強していたとのことである。

(ウ) 2年生のとき

2年になって始業式のすぐあと転入生が泣かされていた。その理由を聞いてみると、「おれに挨拶しないからだ。」とのことだった。口のきき方が横柄で当然のような口振りであった。これが2年生かと驚いた。「みんな仲よくしなければだめだよ。」と注意して、指導要録と学級経営録をもう一度見直した。「自分の思い通りにならないと大声を出したり乱暴をする……。」顔と名前が一致した。要注意人物と書かれていた3人のうちの1人であることもわかった。4月11日に学年打ち合わせがあったので、K児などのいままでの様子を聞いた。

次の日、2校時の休み時間、教室で仕事をしていると、K児が両手をあげて「ヤッター」と言いながら教室へ飛び込んできた。相生小学校から転校してきたH君とチャンピオン争いをして、「2枚蹴りを横腹にきめたら、1発で決まりH君が校庭に倒れ、大の字になって動かなくなっちゃった。」とのことだった。驚いて行ってみると、ふらふら立ち上がるところだった。けがはなかったが親に連絡し、夕方家庭を訪問した。

そこでK児の生育歴を聞いた。社会性と耐性に欠け、自律心も育っていないで、乳離れができていないことを知った。性格が外向的であるので、欲求不満が暴力となって表出するのだなと思った。父は厳格な性格で気短かなところがあり、妻や子に対しても暴力を振るうこともあるとのことだった。母はどうちらかというと勝気で、冷たい面も見られるヒステリックな性格があるかなあと感じた。

男の子だから元気のよいのはいいが、他人に手をあげることだけはしないように注意してもらうことにした。また、自分のことは自分でやらせること。母親が手伝ってはいけないこと。学校に遅れても良いこと。その時は子供にわからないように学校へ電話してくれること。自分の思い通りにならないからといって泣きわめいても取り合わないこと。自分で我慢する以外にどうにもならないことを、だんだんと知らせる以外にないこと。などをお願いして帰った。

4月18日に座席を決めた。1年生の時と反対に、一番北側の列を良い子の列とし、クラスでも良さそうな子を何人か入れ、その列に入れてやった。「今度の先生は、話がわかる。」といって、飛び上がって喜んでいた。

問題行動を持った子を指導するためには、その子自身を知らなければ指導はできない。その子に信頼され、その子と一体となって、その子の気持ちを心の底から理解してやること。しかも、先生は常にその子の味方になってくれているという安心感を持たせること。このことは問題行動を持った児童についてだけでなく、普通児についても言えることであって、信頼関係のないところには、教育は成立しないのである。

この組には、K児のほかにも数名の問題行動を持っていそうな児童がいたので、彼等を理解するために、教室での勉強時の行動観察はもちろんあるが、毎日の休み時間を彼等とともに外へ出て、一緒に遊びながら観察した。毎日昼休みには、ドッジボールをやったが、K児はきまりが守れず、当たっても何とか文句をつけ外に出ないことが多かった。友だちから非難され、その度毎にゲームが中断され、先生の仲裁で試合が再開される運びとなる。もし先生がいなければK児は組み抜けにされていただろう。それでも、だんだんとゲームのきまりを守るようになってきた。というのは、組の者が全員でドッジボールをやっていたので、そこを抜けさせられることは、クラスで1人だけ組み抜けにされ、遊ぶ友だちが1人もいなくなるのに等しかったからである。

また、K児は背の高さも高い方なので、係り活動は先生の方から頼んで黒板係をやってもらった。毎日、毎時間必ず消さなければならない大変な係である。最初は時々忘れることがあったが、忘れた時にも、先生の方からは注意しないで、だまって赤チョークで書いてある上にそのまま書き始めた。すると、友達に注意されて慌てて消した。こうして、1人1人が責任を果たさなければ、集団生活は成り立たないことを教えた。それから、毎日いろいろな用事を頼んだ。そしてK児は、先生が頼んだ用事はいやがらずにきちんとやってくれるということで、皆の前ではほめてやった。そのため「いや」という言葉が先生に対しては言えないようにしてやらせた。

そのうちに、だんだん落ち着いてきて、教科書も持ってくるようになり、出て歩かずに机に向かって勉強もするようになってきた。先生にお世辞を使うようになってきた。

5月の中旬に家庭訪問があった。父親に会いたいので父親のいる日に訪問した。父親は無口でむつりしていたが、世間話をしているうちにだんだん話し出してきた。確かに性格は厳しく、真面目によく働く人のようだった。「男の子なのだから、泣きながら帰って来るような弱虫では困るので、けんかして来ても怒らなかったが、負けて帰ってくることは許さなかった。」と父親が誇らしげに話してくれた。

6月12日・13日の両日に渡り、K児がA君の目にパンチを見舞った。13日には両眼が青く腫れあがってしまった。母親を呼んで家での生活の様子を聞いたが、変わった様子はないとのことだった。

6月16日には、Y君の目にもパンチを見舞った。再度母親を呼んでK児と3人で話し合った。しばらく黙っていたが、「おれの言うことを聞かないで目障りだから、相手の目を狙ってパンチをくれた。」とのことだった。A君も同じだとのことだった。相手の家に親子同伴で行って、親が謝っている惨めな姿を見せた。それから、また、おとなしくなった。夏休みには良く水泳に来た。水泳のない時にも学校へ来て、私のところで遊んで帰った。家で1人でいるのがつまらないのだということだった。

2学期が始まると喜び勇んで学校へ来て羽根を伸ばしていたが、9月12日に下敷きを投げて教室の窓ガラスを割った。「おもしろいから飛ばしていたら、ガラスに当たって割れてしまった。」とのことだった。先生が教頭先生に怒られるのがおもしろくて、この様なことをするのなら、もう2度と遊んでやらないからと、K児にとって一番痛いところをついてやった。二度とやらないから遊んでくれるようにと懇願した。今度やったら遊んでやらないと宣言しておいた。夏休み中は自分の思い通りに飛び回れたのに勉強のためにしばられるのが窮屈で耐えられなかったのだと思った。

以後これといった暴力は振るわなくなった。3学期には勉強もよくやるようになってきた。知能偏差値が59である。理解力は大変よく、興味のあるものには熱中するようになってきたが、根気がなく、ちょっとつまづくと放り投げてしまうことが多かった。

最後のPTAの学年部会が3月に開かれ、部会のあとK児の母親が自主的に残って相談にきた。部活動のサッカーにでも入部して根性をつけ、チームワークなどを通して集団生活になれさせ、社会性を育てていけば、立派な人になれますよと励まして別れた。

(二) 3年生のとき

今年は担任も変わり女の若い先生になった。私も週3時間K児の組へ行って教えている。4月の終

り頃、先生と今度の先生ではどっちが良いか聞いてみた。しばらく考えていたが、どっちがいいかわからんないという返事が返ってきた。かなり満足しているように思えた。1学期の間は、若い先生に甘えることができたのか、暴力も振るわず時々ふざける程度であった。10月の末になって、「ぼくたちの先生は男の子の言うことは全然聞いてくれないで、女の子の言うことは何でもハイハイ聞いてくれる、とても不公平になってきた。」と言いつけにきた。「先生の言うことを皆が聞かないから、先生も聞いてくれないと違うか。」と言ったら、「そうかなあ。」と首をかしげて帰っていった。

11月になって遠足があった。行道山まで一緒に歩いていった。「昨日席替えがあったので、T子ちゃんと並びたいと言ったけど、先生が並ばせてくれなかった。」と不満げに言った。そばにいた友だちが、「それでK児はTちゃんを泣かしちゃった。」と教えてくれた。先生に甘えられなくなってしまった組の中で頭もよく気立ての優しいTちゃんへ近づいて行ったのかなと心配になってきた。3学期になってからはTちゃんにいじわるをしては、Tちゃんにぶたれて泣かされているとのことである。体力からしても、元チャンピオンということからしても、女の子に負けるはずはないのである。一種の欲求不満の変形として、マゾヒズムに発展して行くのだろうか。

3. ま と め

問題行動をもった子供の行動を観察すると、その背後にはいろいろな要因があり、それが品を変え形を変えて表出してくる。この表出されたものは氷山の一角であり、氷面下に隠された要因を除去し育成していくかなければならない。この仕事は、労力と根気のいることであるが、早期に発見し早期に治療しなければならない。また、社会教育を充実して問題行動の要因となるようなものを産み出さないようにしなければならない。学校教育においても児童の興味関心のある素材を用いて、児童が自ら進んで学習していくような指導形態を研究し、その個人の持っている良さを残りなく見つけ、ささいなことでも称賛し、励ますことによって自主性を伸ばし、ストレスのない楽しく充実した学校生活が送れるように努力しなければならないと思う。

評

急激に経済的に豊かになると、児童の耐性や協力性の必要性がなくなり、これらの特性が次如してくるのが一般的な傾向である。わが国の場合、経済の高度成長以来のしつけの仕方が非常にむずかしくなり、子供のしつけに失敗している親が非常に多いのが現実である。しかし、親を責めてみたところで、親も自信を喪失したり、困惑するか教師の責任転嫁しかみないであろう。

本論文のまとめにあるように、児童指導は「労力と根気」のいる仕事である。時間のかかる仕事である。しかし、本事例のように、児童の実態や心理をよく観察し、児童の幸せを願って、その時、その場に応じた柔軟性のある適切な指導をすることによって、必ず児童は少しづつでも変容してくるものである。そして、また、このことによって親も変容してくるものである。

子供が乱暴をするから、問題であるというよりも、問題をもっているから乱暴をするわけであるから、愛情とか承認とか物質によつては、満たされることのない欲求を満たすとともに、耐性をつけるような指導が大切である。本論文でも、この点が指摘されているので、たいへんすばらしい。今後の指導を期待したい。